花高同窓会会報

第121号

発行 令和3年3月1日

秋田県立花輪高等学校
同窓会事務局
〒018-5201 鹿角市花輪字明堂長根12
TEL0186-23-2126 FAX0186-23-2137
URL http://www.ink.or.jp/~hanakoudousou/

印刷 （株）成文社

特集 卒業生へ贈る ことば

陸上のエース

高橋 健一（四三期）

高橋健一さんは花輪高校四三期のご卒業で、在校中は陸上部で、初の全国高校駅伝出場、二〇〇一年世界陸上選手権男子マラソン日本代表をつとめ、ハーフマラソン元日本記録保持者、二〇〇一年第二十二回東京国際マラソン優勝者など輝かしい活躍をされています。現在、富士通陸上部駅伝監督で、チームは今正月のニューイヤー駅伝で優勝しています。今回は、前年が創部以来、初めてニューイヤー駅伝出場を逃していただけに印象強い優勝でした。高橋さんは「コロナ禍で難しい期間もありましたが、できるだけ同じ場所で練習するなどして結束を強めてきました。私以上に選手たちが駅伝のことを気に掛け一人一人がよく考えてやってくれた。」とコメントを寄せています。

花輪高校卒業生及び在校生の皆さんにも、励ましの言葉をいただくことができました。

「鹿角には練習すれば、つよくなる選手は多いと思います。自分は高校の時、陸上で生きていくとは思ってもみなかった。面白かったから、続けてこられた。選手のみなさんは試合を楽しんで走ってほしい！そして社会に出れば、多くの方々とのつきあいになりますが、相手のかたの良いところをみつけていくことが大事なことだと思っています。

ご卒業おめでとうございます。花高の皆さんのますますの、ご活躍、ご健勝を祈念します。

がんばってください。」

「命」

長泉寺住職
奈良 光英（十八期）

春らしくなってきた今日このごろ、卒業生・在校生の皆さんには新しき四月からの生活を、夢に描きながら学業に励んで居ることと想像しています。

人の一生、何時の時代も素晴らしい人生なのですが、振り返ってみると十代は特に「疾風怒濤」の毎日だったような気がしています。人生の中でそのような時期があったことが、後の自分にとって大切な宝となっています。

今から凡そ二千五百数十年前、インドで教えを弘められたお釈迦様（ゴータマ・シッダールタ）は次のようにおっしゃっています。

「我々人間は、父と母・母と父との縁と恩を以てこの娑婆世界（自分の思い通りにいかない世界）に出現したのである。そして誰でも皆キラキラ輝く宝物を持って生れてくる。その宝とは佛心＝慈悲心＝他人を思いやるやさしさの心の種である。その種を一生かけて大事に育て花を咲かせ実をならせるのが人間の一生である。」

また、こうも教えられています。

「我々が縁あって人間として生れてくるのは、丁度海辺の無数にある砂粒の中からたった一粒の砂を見つけることより難しいことなのだよ。」と。

子供が生れるとき、親は誰でも思います。「健康で生れてきて欲しい。健康に育ってほしい。他人に迷惑をかけない人に、そして他を思いやる人になって欲しい。」と切なる願いで生れた自分です。ですから自分の命、他の命、そして命のないものまで、この大宇宙の全てのものを大事にする生き方をします。

～最後に贈る言葉～

「よき人の香りは
風に逆らっても届く」
（お釈迦様のことば）

【長泉寺　鹿角市尾去十三】

花輪高校同窓会による激励会

令和3年1月29日、本校校長室において令和3年2月6日から長野県飯山市で開催される第70回全国高等学校スキー大会へ出場する選手の激励会を行いました。出場代表選手や監督代表が伝統に恥じぬよう頑張ることを誓いました。

2月8日、複合で全国優勝を果たした木村航大くんをはじめ、多くの選手がすばらしい成績をあげております。

（文責　同窓会長　関　厚）

特集 卒業生へ贈ることば

「夢との向き合い方」

弘前大学
医学部医学科2年
木村　悠希
（六四期）

花輪高等学校卒業生の皆さん。ご卒業おめでとうございます。私は二〇二二年に卒業したOBの木村悠希と申します。まずは皆さんが高校三年間の課程を修了し、卒業という人生の節目を迎えられたことを大変嬉しく思います。二〇一九年から猛威を振るっているSARS-CoV-2感染症（COVID-19）に脅かされる日常の中、鹿角市で大規模なクラスターが発生する事なく、今日のこの良き日を迎えられたのは何より皆さんや周囲の方々の感染症対策に対する意識の高さと努力の賜物であることと思われます。卒業生として鹿角市の健康を守ってくれた皆さんを誇りに思います。本当にありがとうございました。

私は高校在学中に祖父の死をきっかけに医師になることを志し、現在、医学部に通っていますが、ここまでの道のりは決して順調とは言えるものではありませんでした。まず現役での受験に失敗し、一年間の浪人を経てもなお医学部に合格するには至らず、最終的に滑り止めで受験した薬学部に進みました。入学当初は医学部への未練が捨てきれず悶々としたし気持ちを抱えたまま大学生活を送っていましたが、学年が上がるにつれて同じ境遇の友人との出会いや薬理学研究室での研究活動などを通して非常に充実した大学生活を過ごすことができました。そして大学卒業後、一年間の社会人生活の中で学士編入試験を受け、昨年度弘前大学に入学しました。医学部受験での単純な浪人年数に換算すると七浪相当になります。いつまでも学生でいるなんてみっともないと批判的な意見を頂くこともありましたが、私にとっては夢への第一歩を踏み出せた重要な選択であったと実感しています。私の経歴から卒業生の皆さんに伝えたいのは「夢は寝かせても良い」という言葉です。私が学士編入試験に合格したのはひとえに薬学部での六年間があったおかげであり、薬理学の基礎研究や学会発表、薬剤師国家試験の勉強など積極的に行う事で生命科学に対する知的好奇心や思考力が身に付き合格に結びつきました。つまり夢が挫折した時すぐに夢を諦める必要はなく「一旦保留にして現在やるべき事を一生懸命行うことが実は夢に繋がっている」ということです。これから新しい生活が始まる皆さんは今後、夢に向かって挑戦をする機会があると思います。仮にその挑戦が失敗した時、抱いた夢の扱い方でその後の人生が大きく変化します。夢へのベクトルは正や負以外に「0」も存在するということを心の片隅に置いていただけたら幸いです。短いですが以上で私の卒業生への手向けの言葉とさせて頂きます。

この度はおめでとうございます。

「答えのない世界に自分らしさを」

弘前大学人文社会科学部
社会経営課程3年
佐伯　ちひろ
（七〇期）

みなさんが入学した年に卒業したちょっとだけ先輩の私から言葉を贈ります。

花輪高校生として過ごした三年間はどうでしたか？

体育祭や文化祭、日々の他愛もない友達との会話、一つ一つ振り返るととても愛おしい日々だったと思います。青春の日々に未練を感じつつも、あてのない希望を頼りに、そっと一歩を踏み出した三年前を思い出します。歩む道の先には、楽しさと、不安と、感動が入り交じった、未知の景色が広がっていました。それはどの道に進もうと誰もが、きっと同じ様に見る景色なのだと今更ながら感じています。

三年前に花輪高校を巣立った私が知ったことは「どんな道に進もうと間違いはない」ということです。大学へ経営を学びに行った私ですが、今は青森のりんごについて勉強しながらメディア活動もしています。正しい色なんてありません。自分の好きな色を選べるのがこれから私たちの進んでいく世界の様な気がします。私も自分の色を見つけながら、たくさん描き直している真っ最中です。ですから、完成した景色を観るのは、もっとずっと先のことではないでしょうか。

加えて、新型コロナウイルスの影響で誰もが予期しなかった世界を歩んでいます。この影響で私にとって一生に一度の成人式が中止になりました。そんな中、鹿角市の成人式実行委員会の方が新しい成人の祝い方を考えてくれました。このように生活が変わったからこそ挑戦の機会がたくさんあると感じています。今この状況において正解を知っている大人は一人もいません。だからこそ、皆さんそれぞれの答えを導き出してください。これまで以上に世界はチャンスに満ちています。

コロナ禍で十分に痛みや悲しみ、寂しさを知っている私たちだから創っていける未来があると思います。自分の色を探しながらぜひ飛び立っていってください。たまに心細くなった時は今日まで過ごした思い出が心を温めてくれると思います。また花輪高校の卒業生は素敵な人たちが揃っています。私でよければいつでも頼ってください。そして「答えのない世界に自分らしさを」見つけてください。

卒業おめでとうございます。

「これまでの出会いに感謝」

田中　忠美
（二七期）

高校を卒業し、大学を出て地元に戻り教師として過ごした三十八年間、多くの子供たちと関わってきました。数名の教え子達とは年一回の年賀状のやり取りが未だに続いています。「おばあちゃんになった」とか「小学校に入学し子育て真最中」等の簡単な近況報告を読むのが正月の楽しみになっています。

定年退職前の二年間は、花

輪第一中学校に勤務しましたので、現在高校在学中の生徒達にもそれなりに関わりました。新聞で知っている子の名前を見る度に、活躍の様子を思い起こしています。しかし、昨年来のコロナ禍で各種大会が中止となり、生徒達の活躍の場が奪われていることは残念でなりません。一日も早い収束を願うばかりです。先日、高校を卒業し社会人として働いている子から、「校長先生でしたよね。」と声を掛けられました。うれしい限りでしたが、名前を思い出せず大変失礼し、家に戻ってからアルバムをじっくり見直しました。

現在は、鹿角市先人顕彰館に週五日勤務しております。きっかけは、花輪高校時代の恩師からの声かけでした。高校卒業以来、ほとんどお会いすることはなかったのですが、覚えていてくださったことに感謝し、これも何かのご縁と引き受けた次第です。恩師はたまに顕彰館に見えるのですが、年を感じさせないパワーにいつも脱帽しております。

今後私は、少しずつ終活に向かっていくのですが、花輪高校同窓会とまもなく訪れる鹿角の統合高校の益々の発展をご祈念申し上げます。

「花輪高校事務室から」

藤井　沙希（六五期）

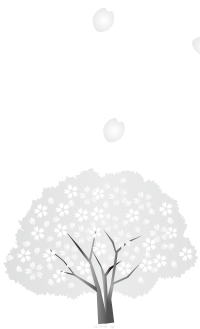
三年生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

私は平成二五年三月に花輪高校を卒業後、秋田県職員として県立学校の事務室で働いてきました。そして今年度からは母校花輪高校で勤務をしています。

この一年間、事務室の中から見える高校生の姿は輝いていました。高校時代に自分も同じように過ごした校舎であることもあって、つい高校時代に戻りたくなってしまうほどです。皆さんの立場からすると花輪高校での日常がとても楽しかったし嫌なことなんてテストくらいだったという人もいれば、反対に嫌なことばかりだったのだから輝いていたって言われてもと思う人もいると思います。例えどちらであったとしても、高校生として頑張って過ごす姿は私には確かにとても素敵に見えました。

卒業を迎え、それぞれの道を進んでいくこととなる皆さんは今、期待や不安など様々な感情を抱いているのだろうと思います。そんな皆さんに私から一つ提案があります。ちょっとしたことでもいいので、何かをできたときには自分を褒めてあげてください。これからの未来にはたくさんの出来事が待ち受けているでしょう。その中で自分に自信が無くなってしまうときやどうしたらいいか分からなくなることがあるかもしれません。そんな時に自分で自分を褒めて（認めて）あげるだけで一息ついてほっとできると思います。まずは高校を卒業できた自分を褒めてみてください。皆さんは「高校を卒業する」という大きなことをやり遂げました。これはすごいことです。嫌々でも楽しんでも自分は三年間を過ごし切ったのだと思えば、これから先もどうにかなりそうな気がしませんか。ぜひやってみてください。

最後になりますが、改めてご卒業おめでとうございます。皆さんの未来が明るく希望に満ちたものとなるよう願っています。



東京支部「花栄会」からの寄稿①

「花輪高校を想う」

坂本　昌丈（十五期）

花輪高校卒業の皆さま、このコロナ禍のなか、ご健勝でお過ごしのことと存じます。

日本はいま少子高齢化の時代に突入し、ふるさと鹿角もその波にのまれ小中学校の統廃合が進んでいると聞いております。高校も例外ではなく、花輪高校という名称もあと何年なのでしょう。四年ほど前、花輪高校という名前での最後の記念式典という声に押されて、創立九十周年周年記念式典に出席し、同期のメンバーと旧交を温めました。また、各界で活躍されている皆さまのお話を伺い、大いに刺激を受けました。懇親会では、オリンピック選手の松宮隆行さん（陸上競技）や小林範仁さん（ノルディック複合）たちとお話したり、一緒に写真を撮ったりして、楽しいひと時を過ごすことができました。

今年の元旦の実業団ニューイヤー駅伝では、花輪高校出身の高橋健一監督率いる富士通が十二年ぶりの優勝を果たしました。先輩として誇らしい気持ちになります。高橋さんは二十年ほど前、花輪高校同窓会東京支部の鹿栄会（現、花栄会）総会に招待され、懇親会でスピーチをされました。ここで、高橋さんにお話する機会を得ることができました。

鹿角市はいま、「スキーと駅伝のまち」をキャッチコピーにしているようです。高校時代を振り返ると、私たちが入学した年からスキーが必修になりました。当時の校舎跡は今では道の駅になっています。月二回、二時限目が終わると全員早弁を済ませ、十二時終了の時報とともに、スキーを担いで水晶山まで登ったことを思い出します。今はどうなっているのでしょう。ちょうどこの年、鹿角にとって初めてのインターハイが花輪スキー場で開催されました。六十年前のことです。全国からたくさんの高校生が集い、厳寒の体育館で歓迎の集いが催されたことを思い出します。当時すでに全国レベルにあったブラスバンド部の演奏や合唱部の歌声に、こんな田舎でこんな素晴らしい音楽が聴けるとは思わなかったと、評判は上々でした。

花輪高校の現役の皆さんやOBの皆さんの活躍は、私にとって楽しみでもあり刺激にもなっております。

髙橋健一さんを囲んで（筆者は前列左）

東京支部「花栄会」からの寄稿②
「心の中にいつもあるもの」

石川さくら（六九期）

花輪高校を卒業し、鹿角を離れてから四度目の冬を迎えました。時の流れは早いもので、私も四月からいよいよ社会人です。大学での四年間の学びはとても実りあるものでした。大学では、夢であった航空関係の仕事に就くため、英語の勉強と研究に励みました。しかし、四年間の中で経験したTeaching Assistantや留学をきっかけに、生徒に英語の楽しさを伝えることのできる教員を目指したい、と気持ちが変化しました。「挑戦心」を大切にし、自分とじっくり向き合ったことで自分らしい選択ができたと思います。

趣味である吹奏楽の活動も、学生時代の大きな支えとして挙げられます。高校時代は吹奏楽部に所属しており、部活動の仲間と毎日練習に励んでいました。仲間と一つの目標を夢中に追いかけていたあの時間は、何にも変えがたい大切なものです。そんな吹奏楽をずっと続けたいと思い、現在、鹿角市出身で関東圏に在住しているメンバーで構成されている吹奏楽団、「鹿角ブラス！」として活動をしています。今年で結成八年を迎え、活動の幅が広がりました。主な活動として、東京で開催される鹿角地区のふるさと会での演奏、ライブハウスでの演奏や老人ホームでの慰問演奏などを行っています。老若男女問わず、「音楽」と「鹿角」をキーワードに人と人が繋がる瞬間は、何にも変えがたい存在です。今年度は感染症拡大の状況を鑑みて、一度もメンバーと顔を合わせることができませんでした。早くメンバーみんなで顔を合わせ、私たち自身も音楽を楽しみながら、聴いている人の心に響く音楽を届けたいと思っています。

四月からは、横浜で専門学校の教員として働きます。今から、どんな新生活が待っているかとても楽しみです。今までの経験を糧に、これからを担う生徒たちと関わっていければと思っています。

今後の情勢が全く見えない世の中ですが、花輪高校に携わる全ての皆様の更なる発展とご活躍を心からお祈りしています。

2019年11月23日に秋葉原でひらかれた「きりたんぽ祥祥まつり」での記念撮影（筆者は左端）

同窓会ホームページについて

ホームページ担当

小田　修（二十期）

同窓会のホームページはこれまで、会報の補完程度に考え頻繁な更新を行ってきませんでした。しかし一昨年来、鹿角市の三高校統合が具体化し、県教育委員会による、令和六年度開学を目指した内容検討の作業が始まりったことから、同窓会としても具体的な内容や準備状況報について、逐次会員への情報発信のためのホームページの充実を目指してきました。

このため昨年ホームページを全面リニューアルし、また、スマートフォンからも容易に閲覧できるようにスマートフォン版のサイトも追加し、利用しやすくしました。

三高校統合については、小坂、十和田高校同窓会と共同で、設置者である秋田県教育委員会に説明会の開催を要請し十二月十三日に開催しています。これらの内容や統合案についてはホームページに掲載していますので閲覧いただければと思います。

今後高校統合と合わせそれぞれの同窓会の在り方についても、三高校の協議が必要になります。

これらの状況についても順次ホームページ掲載に努めてまいります。なお今後はフェイスブックとの情報共有も図りながら、会員の皆様の情報窓口として内容の充実に努めてまいりますので、多くの会員皆様の閲覧と記事の提供やご意見をお待ちしております。

http://www.ink.or.jp/~hanakoudousou/

私だけの四季

鹿角市議会議員
吉村 アイ（19期）

私が十代の頃に長編アニメ映画が劇場で放映された。それから五十年、アニメ好きは変わらず、子供と一緒に宮崎作品、ディズニー作品を見続けてきたが、その興行収入が歴代最高記録を更新し続けているのが、「鬼滅の刃」である。

まず主人公はじめ登場人物の名前を見て、どれもふりがなをしないと読めない。大正時代の物語と聞いても、もっと前の時代劇だと思った。

そして昨年、テレビ放映があったので、あまり気が進まなかったが、見ていると、画面が早い。そのスピードに着いていけなかった。この映像はゲームのスピードと思った。

そんな時、たまたま「鬼滅の暗号」と言う本を読んだら、登場人物のモデルがあり、昔話の鬼退治と神話が起源という。

日本史の視点で「鬼滅の刃」を見ることができたことは、私にとって、大発見であった。